

豊洲「地上は安全」論は成り立たぬ

豊洲予定地は東京ガス工場の操業によって敷地全体がコールタールで汚染され、環境基準の4万3千倍もの発がん性物質・ベンゼンや猛毒のシアンなどが検出された土地です。地下水も2タリングで環境基準の79倍、あるいは100倍のベンゼンが検出されたのは当たり前です。

約束は反故

専門家会議の平田座長は、地下水汚染が明らかになると、「地下水は飲まないから問題ない」「地上は安全」などと述べています。しかし、地上と地下は分けられません。地下の汚染物質をすべて

除去するか、完全に密閉しない限り、地上も「安全」とは言えません。そんなことは技術的にはほぼ不可能です。

そもそも専門家会議は、操業由来の汚染を除去し、地下水も環境基準以下に管理すると約束していました。具体的には、①汚染土壌を深さ2メートルまで掘削除去し、その上に盛り土をする②地下水管理システムで地下水の水位を海拔2メートルで抑える—という二本柱の対策を

するから大丈夫だとしてきました。しかし、そのどちらも破綻したことは明らかです。

柱の一つ目の盛り土は、建物下では行われず、地下空洞があるところが昨年、共産党都議団の調査で

発見しました。そこに地下水が湧出すると、土壌や地下水に含まれている有害物質が揮発してたちまち、基準を超えるベンゼンや水銀が検出されました。

柱の二つ目の、汚染地下水が上

ステムも、ほとんどの観測井戸の水位はいまだに目標の海拔2メートルを上回っています。盛り土は長期間、有害物質を含む地下水にひたされ、再汚染されている可能性があります。

専門家会議は、以前よりは水位が下がっていると言いますが、それは建物の地下空洞にたまった地下水を強制排水した影響です。雨が多くなればまた上がり、強制排水もいつまで続けるか定かではありません。

専門家会議は、地下空洞の汚染対策として、換気することにも、

た有害物質、汚染された土壌や地下水も噴き出るでしょう。地下に深刻な汚染が残っている限り「地上の安全」ですら担保できません。

専門家会議の設置要綱には「食の安全・安心を確保する」と書いてあります。にもかかわらず、平田座長が「安心を担保するのは行政だ」と述べたことは、無責任です。

豊洲予定地の土壌汚染対策は完全に失敗しました。昨年夏に小池百合子都知事が豊洲移転を延期したことは評価できます。豊洲移転は中止し、築地市場の現地再整備の決断をすべきと考えます。

(聞き手・写真 細川豊史)



元大阪市立大学大学院教授

畑 明郎 さん

はた・あきお 京都大学大学院博士課程修了。元日本環境学会会長。元大阪市立大学大学院教授。

土壌汚染対策は完全に失敗

専門家会議の態度は無責任

軟弱な地盤

また、豊洲予定地の地盤は軟弱で、東日本大震災の時に液状化し、噴砂が起きました。30年以内に首都直下型地震が起ると言われています。そうなれば、揮発し